



「生き方の地図」—卒業・修了を迎える皆さんへ

教育文化学部長・教育学研究科長 大橋 純一

最近ではスマートフォンを開けば、どんな場所でも数秒で道順がわかります。目的地を入力すれば、最短距離が線で示され、迷うことはほとんどありません。けれども、ふと考えることがあります。もし人生もそのように「正解のルート」が示されるものとしたら、果たして私たちは本当に豊かに生きられるだろうか、と。

昔ながらの紙の地図は、現在地を探すのにも一苦労でした。道を間違えたり、思いがけない景色に出会ったりすることもしばしば。でも、その“寄り道”こそが、記憶に残る旅の彩りだったように思います。

人の生き方もまた同じです。正確で便利なルート案内に慣れるほど、私たちは「迷う力」を失っていくのかもしれない。しかし、迷うことは決して悪ではなく、むしろ自分という「地図」を描き換える貴重な時間なのだと思います。

秋田大学での学びや出会いは、皆さん一人ひとりの地図の上に、まだ途切れながらも確かな道筋を描いています。そこには、教室での対話や地域での経験、仲間との時間といった、数えきれないほどの“印”が刻まれています。それらはどんな最新のアプリにも載っていない、あなただけの「生き方の地図」です。

これから進む社会の中では、時に道を見失うこともあるでしょう。けれども、そんなときこそ焦らず、自分の歩いてきた道を指でなぞってみてください。思いが揺れたこと、ためらったこと、それでも前を向いたこと。そこにはきっと、次の方向を示すヒントが残っているはずです。

そしてもうひとつ、忘れないでほしいことがあります。地図は一人で描くものではありません。誰かの言葉が道しるべとなり、誰かの背中が一步を踏み出す勇気となる。人と出会い、人に頼り、人

を支えながら生き、その積み重ねの中で、私たちは自分の地図を少しずつ更新していくのです。

どうか、地図アプリが共通に教える最短距離ではなく、“納得の道”を選びながら歩んでください。そして、迷いながらも自分で描いた地図を誇りに思ってください。その地図こそが、皆さんが秋田で育んだ知恵と人間性の証であり、これからの人生を導く確かな判断軸となるはずだからです。

私たち教職員にとって、この秋田大学で皆さんと出会い、ささやかながら、それぞれが描く「地図」の一翼を担えたとしたならばこの上ない喜びです。皆さん一人ひとりの未来が確かな歩みの先に実を結び、花開くことを心より願っています。



【卒業生の声】

大学生活を振り返って

教育実践コース 4年次 高橋 杏

気が付けば、大学生活の四年間は本当にあっという間でした。入学当初は期待と不安が入り混じっていましたが、多くの出会いに支えられながら、少しずつ自分なりの歩みを重ねることができたと感じています。

学部での学びは、私にとって「人と向き合うこと」を考え続けた時間でした。講義で理論を学び、演習や実習を通して実際の教育現場に触れる中で、子ども一人ひとりの思いや背景に目を向けることの大切さを実感しました。思うように言葉が届かなかった経験や授業の難しさを痛感する瞬間も多々ありましたが、それらはすべて、これから先の自分自身を支えてくれる学びになっているように思います。また、私の所属する保健体育科専攻は人数が少なく、その分とても個性豊かなメンバーが揃っています。仲間と一緒に受けた数々の授業、スキー合宿、そして何気ない飲み会の時間まで、一つ一つが大切な思い出です。

さらに、陸上部での活動も、大学生活の大切な柱になっていました。仲間と目標に向かって努力する中で、結果が出る喜びも、思うようにいかない悔しさも経験しました。何よりも周りの方々に恵まれ、この四年間 陸上を続けることができたのだと感じています。部活の時にする何気ない会話が、仲間と一緒に努力する時間が、私にとって大きな支えとなっていました。現在は、マラソンに取り組み、長い距離を一步一步積み重ねる日々を送っています。苦しい瞬間もありますが、自分のペースで走り続ける感覚は、学びや教育にもどこか通じるものがあるように思えます。

卒業研究では、多くの方に支えられて最後まで取り組むことができました。四年間で出会えた仲間や先生方への官署の気持ち は尽きません。

春からは、秋田大学教職大学院へ進学します。これまで支えてくださった方々への感謝を胸に、これからも人とのつながりを大切にしながら、自分の歩幅で学び続けていきたいと思っています



↑ 卒業研究発表会



4年次飲み会→



↑ 2026 鹿兒島マラソン

大学生活を振り返って

こども発達コース4年次 小館 孝之介

改めて振り返ってみると、私の大学生活は非常に充実していました。まず、保育や教育という、自分が大学入学以前からずっと学びたかったことについて、仲間と一緒に楽しみながら学ぶことができました。また、生活面について、在学中は大学の学食をよく利用しており、友人と一緒に食事を楽しんだり、自分一人でのんびりと食事を楽しんだりしていました。余談ですが、私は学食のメニューの中では豚汁が好きで、豚汁が出る日は何度も豚汁をおかわりしていました。そして、私はいつの間にか、学食のスタッフの方と顔見知りになっていました。そのため、学食で過ごした日々もすてきな思い出となりました。

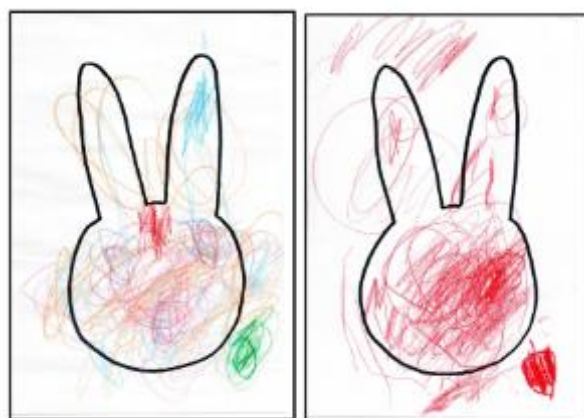
私にとって、大学での学びの中で特に印象に残っているのは実習です。私は、保育所、幼稚園、乳児院、小学校、特別支援学校、児童センターというように、保育・教育に関する様々な現場で実習し、かかわりを通して子どもたちの成長・発達を支える経験を積み重ねてきました。そして、それぞれの現場で様々な感動体験をしてきました。たとえば、保育所や幼稚園での実習では、年をまたいで同じ子どもたちとかかわることができた

め、長いスパンにおける子どもの成長・発達のすばらしさを実感しました。このような感動体験を通して、私は改めて、保育や教育の魅力に気づくことができました。その一方で、実習では困難に直面することも数多くありました。特に、小学校や特別支援学校の実習では、子どもたちにとって理解しやすく、魅力を感じることができるよう授業をつくるのが難しかったです。しかし、事前準備として日々の授業の様子を観察したり仲間と打ち合わせをしたりしたことで、最善を尽くして授業を行うことができました。また、授業後には反省会を通して自分の課題を把握することができ、教師としての学びを深めることができました。私は来年度から特別支援学校の教師になるため、より良い教師になれるように、実習での経験を活かして努力し続けていきたいと思っています。

以上のように、私は充実した大学を送ることができました。そのため、秋田大学で学ぶことができ、本当に良かったと、強く思っています。大学卒業後は大学での学びを活かしつつ、社会人として楽しく、充実した生活を送っていききたいと思っています。



この日、私は学食で豚汁を5杯食べました。



1歳児が私と一緒に描いたウサギの絵

大学生活を振り返って

心理実践コース 4年次 柳田 実海

秋田大学での4年間を振り返ると、学内外のさまざまなことに興味をもち、挑戦を続けることのできた学生生活だったと感じています。

1年生の頃は授業がとにかく多く、課題をこなすことに必死でしたが、同じコースの友人との関係が深まり、今でも大切にしたい貴重な時間だったと思います。特に、心理実践コースの学生が1年後期に受講する「知覚認知心理学」では、授業内容をまとめたオリジナルの教科書を作成するという最終課題が印象に残っています。内容を充実させようとするほど大変でしたが、資料作成の基礎や自分らしい表現方法を学ぶ良い機会となりました。

2年生からは専門的な心理の授業が始まり大学生活にも慣れてきた頃、得意な英語コミュニケーションを活かして、新入生向けの英語講座を行うA-Conのリーダーとして活動しました。大学生になると意識的に英語を使う環境に身を置かなければ、語学力は低下してしまいます。英語に限らず、日本とは違う価値観を言語の観点から知ることができることはとても貴重なことだと私は考えます。

3年生では心身の健康を考えヨガを始めました。日々湧いてくる多くの感情に振り回されるこ

とが少なくなり、ありのままの自分を受け入れられるようになったと感じています。また、竿燈まつりにも参加し、地域のお祭りを「見る側」だけでなく、「見せる側」として体験したことで、秋田という土地への見方が大きく変わりました。

4年生になって卒業研究のシーズンとなり、心理の勉強や実習もこなしながら執筆を進めました。今年の4年生は人数が多いのですが、それぞれの個性が光る独自性とアイデアに富んだ研究ばかりで、コースのみんなと研究の進捗を話す時には分析の方法や実験の仕方など、新しいことを多く知ることができて豊かな時間でした。また、関心のあったリポーターの活動をはじめ、秋田市の市民リポーターとして一年活動をしました。専門分野に固執しない将来設計を考えるきっかけにもなり楽しい経験でした。

この4年間で、自分がどんな人間でありたいか、どんなことに「好き」という感情が起こるのかを沢山考えました。この自分と向き合った4年間は今は直接結果として現れなくとも、必ず未来の自分にヒントをくれると信じています。そして、このように人として感性を磨くことができたのは、周りの環境や周囲の方の支えなしには不可能だったと強く感じています。本当に、この学校でみんなと過ごせてよかった。皆さんの学生生活が、学びと喜びの多い実りある学生生活になりますように。



4年間を振り返って

国際文化コース 4年次 佐々木 彩乃

私が入学した 2022 年の春は、新型コロナウイルスの波がようやく落ち着き始めた時期でした。そのため入学当初は大学の活動もほとんどがオンラインで、県外出身の私には友達が一人もいませんでした。一人で出席した入学式、バスの窓に映る見慣れない風景を眺めながら、「これから 4 年間やっていけるのかな…」と期待よりも不安な気持ちでいっぱいだったのを覚えています。ところが、授業やサークル、アルバイトなどさまざまな活動にチャンレンジしているうちにそんな不安は徐々に薄れていきました。

私の大学生活 4 年間で要約するならば、まさに「よく学び、よく遊んだ 4 年間」でした。始まりこそ一人ぼっちの静かなスタートでしたが、4 年間を通してたくさんの友達ができました。友達関係における大学と高校の大きな違いは、学部や出身地の違いだと思います。自分とは異なる環境で生活してきた人と関わることで、視野が広がった気がしています。また、勉強や就活で辛いときに愚痴を吐いたり相談したりし合えるという点でも、友達の存在は非常に大きかったです。

そんな私の卒業研究は、乙女ゲームと社会的背景の関連について分析した研究でした。大変な部分もたくさんありましたが、大学に入学してから初めて「面白い！」と感じた社会学という分野で、自分の好きなものについて研究できたのはとても楽しかったです。書き始めた頃は、本当にこの内容で数十ページにわたる研究ができるのか不安でしたが、いざ研究を進めていくと突き詰める箇所が無限に出てきて、学問や研究に終わりはないことを痛感させられました。小さな疑問を学びに繋げる姿勢の重要性に気付けたことは、大学生活の学びの中でも自分にとって大きな財産です。

こうして振り返ると、バスの中で孤独を感じていた 4 年前の自分に「大丈夫だよ」と声を掛けたくくなります。大学生としての生活も残り 1 カ月、春からは社会人として新たな生活が始まります。本音を言えば不安だらけではあるのですが、将来振り返ったとき、また過去の自分に胸を張れるように、大学生活での学びを大切にしながら私らしく頑張っていけたらと思います。



短期研修報告：グリフィス大学での研修

英語教育コース 4年次 五十嵐 舞羽・佐々木 萌・堀内 理央・青木 優香

私たちは5週間、オーストラリアにあるグリフィス大学での研修に参加しました。初めての留学で不安なことも多かったですが、先生方や金銭面で手厚いサポートのおかげで安心して挑戦することができました。また、将来教員として働くために、日常的で自然な英語の習得や異文化理解や相互理解について考えるなどそれぞれ目的をもって参加することで、充実した毎日を送ることができたと思います。

研修期間中は、主に英語力を高めるための授業と英語教育について学ぶ授業を受講していました。授業中の教員の発問の多さを肌で感じ、常に自分の意見をもった状態で授業に参加することができたため、たくさんの表現を吸収したり間違いを恐れずにコミュニケーションを取ったりすることができました。また、教育について学ぶ授業では、様々な教育ツールを知ることができました。特に、ICTを活用したものに多く触れ、今後教員になった際に、児童生徒の発達段階や学習状況に応じて活用していくことができると感じました。

授業以外の時間では、授業後や週末に友人やホストファミリーと観光地やレストラン、スーパーなどを訪れました。毎日のように開催されているマーケットやコアアラを保護するためにつくられた施設、商業施設などを通じて、日本との違いや異文化体験をすることができました。ホストファミリーとの日常会話から英語学習につながるうえに、ローカルな家庭料理や家族内のイベントにも参加させてもらうことで、英語力の向上だけでなく、

家族や仕事への向き合い方や考え方など、実際に生活しないと感ずる事の出来ない体験をたくさん経験することができました。

全員が初めての留学ということもあり、多くの問題に直面しました。事前準備や現地での公共交通機関の利用、言語の壁等「楽しい」だけではない新たな学びがあり、協力し合うことの大切さを改めて実感できた研修でした。このような貴重な経験を多くの学生に伝えることのできる機会の確保や、現地で身につけた英語力を維持できるよう英語を活用する場を見つける等、研修で得られたことを積極的に活かしていきたいです。



中国短期研修の紹介

国際文化コース 4年次 佐藤 杏璃・鈴木 千尋

私たちは中国の歴史や文化に関心を持つ2～4年生の計6名で、11日間の短期研修に参加しました。ハルビンの黒竜江大学で中国語の授業を受けた後、北京へ移動して観光し、異文化理解を深めました。

黒竜江大学には5日間滞在し、初日に中国語レベルテストを受け、その後4日間は語学授業を体験しました。クラスはテストの結果に応じてレベル分けされており、自分に合った難易度で学ぶことができました。授業はスピーキング・ライティング・リスニング・総合の科目に分かれており、休み時間には日本からの留学生や他国の学生と交流する機会もありました。初日はリスニングに苦戦しましたが、最終日には耳が慣れ、話す力にも少しずつ自信ができました。また、黒竜江大学の日本語学科の方々との交流会では、日常表現やおすすめの料理、大学生活などについて語り合い、親交を深めました。

ハルビン滞在中は地下鉄を利用して「聖ソフィア大聖堂」「中央大街」「黒竜江」などハルビンの代表的な観光地を訪れました。聖ソフィア大聖堂はロシア建築が特徴で、伝統衣装を着て写真を撮る人々の姿も多く見られました。

北京観光1日目は万里の長城、北京動物園、什刹海を、観光2日目は天安門広場、景山公園、天壇、前門を訪れました。写真でしか見たことのない景色を実際に見ることができ、とても感動しい経験になりました。北京動物園では、パンダを見ることができてとても癒されました。地下鉄などでは空港のような手荷物検査が実施されており、日本との大きな違いを実感しました。特に、天安門広場の手荷物検査はどの交通機関の検査よりも厳重で、警備の人の多さやノートの書き込みまでチェックされたことがとても印象に残りました。

今回の研修の成果として会話の実践力が身についたと実感しています。大学の授業や食堂、観光の際に話す機会があったため、「中国語を話す」ということへのハードルが下がり、会話のレベルが向上したように感じます。拙いながらも話すことで、アウトプットの機会になり自信に繋がりました。

短期間の研修でしたが、実際に現地を訪れ、日本とは異なる環境に身を置いたことで知見が広がり、文化面や社会面でも視野が広がったと感じています。留学や海外研修を検討している方には、ぜひ一歩踏み出して様々なことを経験してほしいと思います。



短期研修報告：聖公会大学夏季短期研修の紹介

地域社会コース 3年次 大塚 理湖、国際文化コース 3年次 工藤 優・清水川 心菜

私たちは韓国・ソウル特別市にある聖公会大学で約2週間の研修に参加しました。現地での授業内容や文化体験、生活を通じて得た成果について紹介します。

平日の午前中は韓国語の授業を受けました。文法や単語を学習するだけでなく、自分の故郷について、そして2週間の韓国での生活を振り返ってなど、様々なテーマに即した発表、それに対する質疑応答や作文なども行いました。授業はすべて韓国語で行われるため、聞く、書く、話す力が身についたと感じています。授業のなかではペアワークをする機会も多く、他の大学から参加している学生とも交流を深め、互いに高め合うきっかけになりました。

韓国語の授業終了後には、聖公会大学の韓国人学生と交流する時間が2回設けられました。交流の場では、韓国のお菓子を食べながら互いに質問をし合ったり、ジェスチャーゲームやしりとり、韓国ドラマの『イカゲーム』に登場する遊びを体験したりするなど、楽しみながら交流を深めました。授業で学んだ表現を会話の中で用いることで、「伝えようとする姿勢」が大切であることを実感するとともに、文化面での学びも多くありました。韓国では日本のアニメやキャラクターが人気だったり、日本ではK-POPや韓国ドラマが身近な存在であったりなど、互いの文化が日常生活の中に浸透していることを実感しました。これらのコミュニケーション活動を通して、言語だけでなく文化への理解も深まり、貴重な経験の一つとなりました。

今回、私たちは文化体験でMBC放送局へ見学に行ったほか、K-POPダンス大会にも参加しました。MBC放送局では、実際に出演者が使用する控室や、週末放送される音楽番組のステージ設営の様子、さらに番組を作成する作業室などを見学させていただきました。K-POPダンス大会では、研修1週目にNewJeansという韓国アイドルのバックダンサーの方から「Supernatural」という曲の振り付けを直接ご指導いただき、一緒に練習を行いました。研修2週目にKPOPダンス大会でグループごとにダンスの練習成果を披露し、バックダンサーの方に選ばれた1位～3位までのグループ

にはお菓子の詰め合わせや韓国のりなどの景品が送られました。

放課後や休日のフリータイムでは地下鉄を利用し、ソウル市内の様々な観光地や現地で話題の名所を巡りました。韓国の伝統衣装「チマチョゴリ」を着用して、景福宮という朝鮮王朝の王宮を訪れたり、有名芸能事務所のHYBEの本社を見に行ったりしました。さらに、韓国式のかき氷ピンスのお店や、可愛く装飾されたスイーツが食べられるカフェにも行きました。観光地の中でも、漢江という川沿いにある公園は景色がとても美しくリラックスできる場所で、研修期間中に2度も訪れてしまうほど印象的な場所でした。

現地の学生や先生、お店の方々などと積極的に会話することで、より実践的な韓国語運用能力が身についたことを実感しました。現地での出会いや貴重な学びの1つ1つが私たちの人生にとっての大きな宝物となりました。ぜひ皆さんにも海外研修への1歩を踏み出してみたいと思います。



ドイツ短期研修報告

地域社会コース 4年次 大沼 和眸

私は卒業研究の資料閲覧のため、ドイツでの海外研修に参加しました。研究テーマは、明治期に秋田県の阿仁鉱山に來山したアドルフ・メツガー (Adolph Mezger, 1836-1899) がザクセン・ドレスデンへ持ち帰った資料を閲覧し、技術移転と日本文化のあり方について再考するというものです。今回の経験を通して強く感じたのは、実際に現地に足を運ばなければ見えてこないものが数多くあるということでした。

はじめに訪問したドレスデン人類学博物館では、メツガーが日本から持ち帰ったとされる資料を閲覧しました。銅製の七福神像や小型の観音像、刀装具などが丁寧に保存されており、大きな驚きを覚えました。これらは研究テーマに直接関わるものばかりではなく、メツガーが骨董品として購入した可能性も考えられますが、歴史的資料を実際に自分の目で確認できたことは非常に貴重な経験でした。

阿仁鉱山には『銅山働方之図』と呼ばれる絵巻物が残されていますが、ドレスデンで閲覧した資料の中にはそれと類似する作品が確認されました。また、日本の鉱山開発に関わった人物の文献から、メツガーが日本の鉱山文化に強い関心を抱き、当該絵巻物と思われる作品を模写させたとの記述も

見つかりました。これらの点から、メツガーが阿仁鉱山に滞在していたことを改めて確認できただけでなく、日本文化に対する彼自身の興味関心の一端も明らかになりました。

私にとって海外渡航は初めての経験であり、語学の習得や事前準備には苦労もありました。しかし実際に現地に立ったとき、目の前に広がる光景はそれまでの想像を大きく超えるものであり、準備してきた努力が報われたと実感しました。また、資料閲覧だけでなく、その土地の食や文化、人との交流にも積極的に触れることを心がけました。そうすることで研修の時間をより充実したものにしてくれたと感じています。

最後に、海外研修に参加する際には、その国の語学を学んでおくことを強くお勧めします。語学学習は文化や社会への関心を深めるきっかけとなり、現地での学びをより豊かなものにしてくれるからです。そして同時に、自国の文化の良さを再認識する機会にもなると考えています。

「百聞は一見にしかず」という言葉の通り、実際に足を運ぶことで得られる学びは計り知れません。ぜひ多くの方に海外研修を経験していただき、自らの可能性を広げてほしいと思います。



令和8年度 教育文化学部 学生協議会委員が決定しました

学生協議会は、学生の大学・大学院生活の充実を図ることを目的に、2014年度に設置された「学生による、学生のための組織」です。学生と大学院生から構成され、各コースから委員が1名から数名選ばれます。委員の任期は1月から12月までの1年間（再任も可）となっています。

活動内容としては、①学生の大学・大学院生活の充実に関する事、②学生の教育及び環境の改善に関する事、③学生のボランティアに関する事、④学生からの情報発信に関する事、⑤その他学生の教育に関する重要事項を協議すること、です。具体的な活動紹介については、WebClas「学生協議会」のコース（学内のみ）や、過年度の『みなおと』第64号（8～12ページ）に掲載されていますのでご覧ください。（学生協議会議長 佐々木 千佳）

★令和8年度の学生協議会委員は右表のとおり決定しました。掲載学年は2025年度のもので、4月より新学年となり活動します。

🌸新委員のみなさん、これから1年間
どうぞよろしくお願いいたします！

学生協議会の活動を通じて、学生自身が学部および大学の教育や環境の一層の充実、改善のために主体的に関わってくれることを願っています。



初等中等教育コース	1	桜庭 幸登
初等中等教育コース	1	佐藤 耀
初等中等教育コース	1	根守 紗彩
特別支援教育コース	1	須藤 理子
こども発達コース	1	大沢 侑奈
地域文化学科	1	小松 優亜
地域文化学科	1	金 真凜
地域文化学科	1	柳田 朔
教育実践コース	2	森内 瑞葉
英語教育コース	2	星 涼太郎
理数教育コース	2	後藤 愛依琉
特別支援教育コース	2	小林 歩夢
こども発達コース	2	後藤 日菜乃
地域社会コース	2	佐藤 優芽実
地域社会コース	2	村上 心優
国際文化コース	2	加藤 凜夢
心理実践コース	2	小玉 陽生
教育実践コース	3	小田島 陸
教育実践コース	3	平澤 創一郎
英語教育コース	3	齋藤 実蘭
理数教育コース	3	浅野 巴
特別支援教育コース	3	内海 睦
こども発達コース	3	石崎 史華
心理実践コース	3	植田 早耶
国際文化コース	3	近藤 風花
地域社会コース	3	安田 佳恵
地域社会コース	3	山口 千颯
心理教育実践専攻	院1	野呂田 萌子
教育実践専攻	院1	相馬 慈



(キャンパスの風景 (2026.2.26))

学部・研究科の活動 (2026年2月～3月)

【全学】

- 2/25-26 : 前期日程
- 3/12 : 後期日程
- 3/22 : 学位記授与式

【学部】

- 3/9 : 第1回地域連携フォーラム
- 3/16 : 第2回地域連携フォーラム
- 3/22 : 「卒業を祝う会」

【教育学研究科】

- 2/13-14 : あきたの教師力高度化フォーラム

【附属学校園】

- 2/18 : 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会総会及び研修会
- 3/6 : 附属中学校卒業式
- 3/10 : 附属特別支援学校卒業式
- 3/11 : 附属幼稚園卒園式
- 3/16 : 附属小学校卒業式

発行 **秋田大学教育文化学部／教育学研究科**

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音(かねのね)」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌(1910年制作)を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。